『西洋家作雛形』・『Cottage Building』の比較研究　2
―産業革命後英国における住宅改善の取り組みと本書の位置づけ―

正会員　○ 根来美和 *1
同　中谷礼仁 *2
同　本橋仁 *3
同　丸茂友里 *4
同　廣瀬翔太郎 *5

明治　建築仕様書　産業革命
西洋家作雛形　Cottage Building　労働者住宅

0. はじめに

『西洋家作雛形』の底本 "Cottage Building" 第 6 版（1870）は、イギリスの建築家 C・Bruce・Allen[1]（以下アレン）による、労働階級の住居改善策を論じた書籍である。1849 年の初版以来、1906 年までに 13 版を重ね、数回の増補が行なわれた。

【書誌情報】**表題：**Cottage Building (6th ed.)　**副題：**Hints For Improved Dwellings For The Labouring Classes　**著者：**C.Bruce Allen　**出版社 / 出版年：**London: Strahan & Co., 1870, (1st ed. London: John Weale, 1849)　**体裁：**190mm × 109mm

Fig1.『Cottage Building』第 6 版書影

1. 研究目的

本稿では、『Cottage Building』出版背景に関して述べる。本書、Chapter I（以下、Ch.1）は、当時の英国における深刻な貧困層の問題について取り上げられ、その劣悪な住環境に対する著者アレンの批判が述べられている。まず、Ch.1 の概要についてまとめ、同箇所に紹介される人物とその意見に関してまとめる。

さらに、本書は Ch.2 以降において、その住宅改善案について具体的な技術解説とともに述べており、どのような具体的な提案をもって、底本の著者がこの社会的問題に対して取り組んだかについて述べ、同書の性格の一端を明らかにする。

2.『Cottage Building』執筆の諸背景

産業革命と劣悪化した貧民住宅

産業革命後の英国において、農地の囲い込みより仕事を失った農民の多くは工場労働者となり、その数は増大した。労働者階級は工場付近に住む場を求めたが、そこには十分な居住施設が用意されてはおらず労働者の住環境は悲惨な状況であった。当時、フリードリヒ・エンゲルス（Friedrich Engels, 1820 - 1895）も著書、『イギリスにおける労働者階級の状態』（原題 Die Lage der arbeitenden Klasse in England）において、産業革命によって生まれた労働者階級の存在について、その生活環境とともに述べている。こうした英国において既に社会問題化していた生活環境に対して、住宅供給に、その改善案を求めようとしたのがアレンであった。

3. 社会的背景とその人物関係

以下、括弧内記述は CH1 より引用

CH1 に紹介される人物を図にまとめた。(fig.2) アレンは、彼らの言葉の引用とともに、その主張について説明を加えている。W.S. ジリーは具体的なコテージの様子を示しながら「彼ら（古風な農夫たち）がどのように横になり休むのか、どうやって眠るのか、どのように良識を保つのか（中略）想像もつかない」と言う。またディケンズ[2]は「もしも、(中略）農業労働者について行けば、私たちは（彼らの住む）たった二つの部屋で構成されるその粗末な小住居のことを知るだろう。(中略）寝室では、両親と彼らの子供たちの男の子と女の子が、無差別に混合しており、そしてしばしば間借り人まで、ただ一つの同じ部屋に眠った」と記していた。

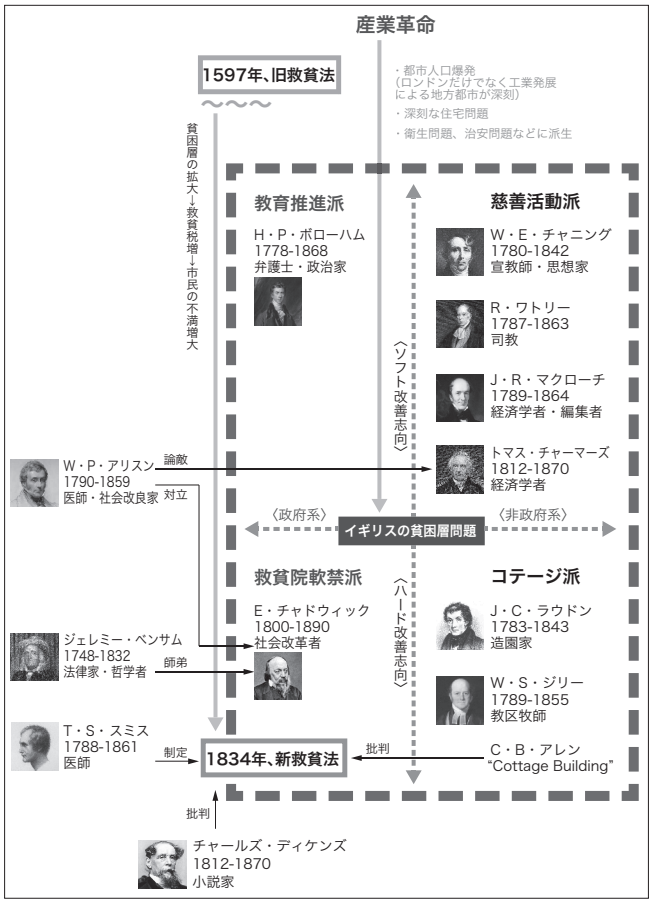

Fig2.『Cottage Building』Chapter.1　登場人物

アレンの主張

著者アレンは、これら貧困と劣悪な住環境について「あたりまえのように広く拡散している悪化を、ほんのわずかでも止められる方法があるならば、その方法は採用に値する」(原書 p.15) とした上で、住宅供給による改善策を主張する。「貧困者に、彼らの財力に見合った家賃で快適な住まいが与えられる」(原書 pp.15-16) ことである。さらに、「(快適な住居の提供）問題に向き合うこと、また、貧困者の健康状態を和らげること、さらに清潔、常態、自尊心の習慣化を誘導することにより、ゆくゆくは貧困の増加を防ぐことになる」(原書 p.16) とする。

4.improved cottage の提案　以下、括弧内記述は Ch.1 より引用

以下、アレンが具体的に提唱する改良家屋 "improved cottage" について、その主張とともに紹介する。"improved cottage" は、本書中 pp.55-94 に掲載される。農耕地域における労働者の生活改善を願ったイギリス人編集者 J. ウィール (J.Weale) の論文を冒頭紹介し、その後、図版と文章を併記しながら、解説を行う。(fig.3) 提案される改良家屋の以下の二点について、それぞれ具体的に説明を行う。

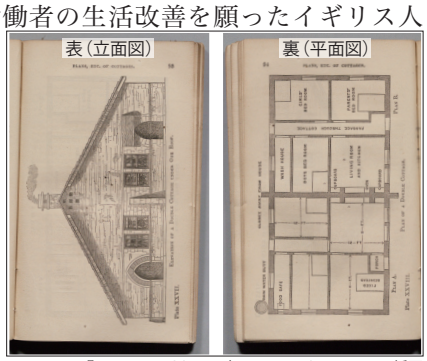

Fig3.『Cottage Building』内 "improved cottage" の挿図

1　経済性

経済性を重視することは『Cottage Building』の出版の経緯にも沿った部分である。具体的には以下の内容があげられる。

・1 軒あたり 100 £のセミデタッチドハウス (平屋建て、煙突を 2 軒で一つを共有した住居）の形態をとる
・ドア、窓枠、サッシュの規格化をすること
・床、壁、天井は総板張りにすること

この他にも、cottage に置く調理用ストーブでも経済性を考慮した提案が見られた。(fig.4)

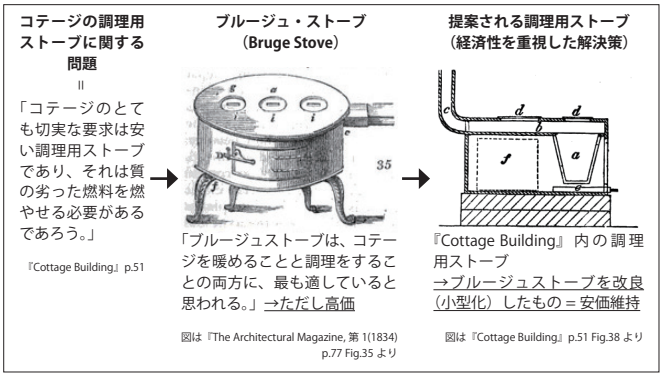

Fig4.『Cottage Building』内の調理用ストーブに関する記述および挿し図

2　住環境

"improved cottage" は経済性を重視するだけでなく、住環境の改善も意図されている。まず「コテージ住まいの妻は自分の仕事をする場所を自由に決められるべきである」という著者の主張に基づくもので、以下の必要諸室とその平面図があげられ、汎用をもった計画を行っている。(fig.5) その汎用性を高めるために、改良家屋に備え付ける家具も含め、複雑なものは除かれるべきだとしている。

そして、廊下を住居の前から後ろにかけて中央を通すことで家族全員の寝室が設けられており、それらを独立させる仕組みになっている。

汎用性をもとめる一方で、寝室については、他機能の流入により、その機能を阻害しないよう配慮が必要である旨を述べている。具体的には、洗濯場は寝室に使える程大きくしてはならないということが述べられており、これは貧しい人々が洗濯場を寝室として使用してしまうことを防ぐという意図のもとである。共用のマットレスを床に引いて何人もが寝てしまうというアフリカでの悲惨な事例が参照されており[3]、そのような状況にならぬような対策としている。そのため各寝室にも作り付けのベッドを設ける必要も述べる。

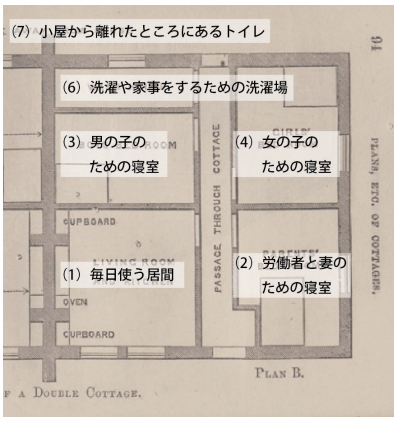

Fig5."improved cottage" の平面図（筆者加筆）

5. 考察 - 造園家ラウドンの影響

こうした著者アレンの思想的な背景には有力な造園家であった J・C・ラウドンの影響が見られる[4]。ラウドンは貧困層の住宅改善を望んだ造園家でもあり[5]、田舎のコテージに着目し、菜園などを含めたコテージを持つことが出来れば、生活を充足させることができると説いた。このような考え方は、『Cottage Building』にも共通するものである。ラウドンの思想を組み入れた本書におけるアレンの提唱は、一建築家の立場から景観としての garden にとどまらず、ハウジング、自給自足という位置付けの生活指標も含まれていることが特徴的である。

6. 結論

本稿では、本書が執筆された当時の英国における状況をまとめ、アレンの思想的立脚点を明瞭にした。その上で、具体的提案である "improved cottage" について、その思想との関連を調べ、その背景にあるラウドンの影響について述べた。

註釈 1. C.Bruce Allen、生没年不明、英国人建築家。1850 年に行われた翌年開催のロンドン万博の競技設計参加者の中に "C.Bruce Allen" の名前がある。　**2.** 本文中では「" サニタリー・レポート" の記者」とあるが、調査によって小説家チャールズ・ディケンズ (Charles John Huffam Dickens, 1812-1870) であることがわかった。　**3.** 原書 p.59「アフリカの多くのコテージにある極度に悲惨な寝室の設備は、我々に赤道地方のアフリカの黒人が実践している方法をとらざるを得なくさせる。」また、ロンドンで出版された『The Mechanics' Magazine』(1870.9.2 出版分) 内に同様の記述「何千人もの人々が、どんな種類の寝台もなく、共用の何枚ものマットレスだけが敷いてある床の上に横になる。」があり、これを指していると考えられる。　**4.** 原書 p.12「故・ラウドン氏はこの問題についてこう述べている。現在の労働者たちの階級で、彼らが得ることが出来るのは、財産家の雇い主からの慈悲やいたわりによるわずかな手当だけであった。農業や工場で雇われているイギリスの (British) 一般的な 労働者に共通する、不幸で不安定な傾向は、もっとも嘆かわしく、彼らの状況を良くするためにあらゆる努力がなされるべきである。地方のすべての既婚労働者が庭と快適なコテージに居住するようにするために整備する事を、簡単に行なうような手段を私は知らない。親切心があり、利己的でないと言うにふさわしいその男 (故・ラウドン氏) は、慈悲深く、(前述のような) 理解のある願いを口にしていた。」　**5.** 一方では、ラウドンはガーデネスク（gardenesque）という概念を確立した。彼がとりわけ奨励したのは秩序ある多様性であった。また彼はイギリスで最初に都市型公園の開設を主張した人物であった。

図版出典 Fig1. C.Bruce Allen, Cottage Building 6th Edition, London: Strahan & Co., 1870 書影（所蔵：国立公文図書館）　**2.** 筆者作成　**3.**『Cottage Building』(pp.93-94)　**4.** 筆者作成　**5.**『Cottage Building』(p.94)（筆者加筆）

*1 早稲田大学 修士 (工学)
*2 早稲田大学理工学術院 教授 博士 (工学)
*3 早稲田大学理工学術院 助手
*4 早稲田大学 修士 (工学)
*5 早稲田大学 学士 (工学)

*1 Waseda Univ., M. Eng.
*2 Prof, Faculty of Sciences and Engineering, Waseda Univ., Dr. Eng.
*3 Research Assoc, Faculty of Sciences and Engineering, Waseda Univ.
*4 Waseda Univ., M. Eng.
*5 Waseda Univ.